

文化財保存施策の国際的研究 (②セ01-09-4/5)

本プロジェクトは、文化財の保護のための諸施策、またこれに関する国際協力を円滑に進めるための基礎となる国際情報の収集・研究、基盤づくりを大きな目的とし、これを政策面における文化財保護制度の比較研究（諸外国の文化財保護制度の研究）、情報交換・ネットワークづくりのための国際ワークショップの開催の二つの側面から展開している。

諸外国の文化財保護制度の研究

目 的

諸外国または国際社会における文化遺産の概念やその保護の理念、政策、各種施策に関する最新の動向を常に把握し、分析し、情報を蓄積しておくことは、国内の文化財保護施策のさらなる充実に資するためにも、また日本が行う文化遺産分野での国際協力事業をさらにレベルアップして実りのある国際貢献を実現していくためにも重要である。本研究は、この観点から、諸外国あるいは国際機関の政策・施策レベルの動向に関する調査と比較研究を行うものである。

成 果

今年度は、世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保護に関わる各種の情報を収集し、分析した。主なものは以下のとおり：第33回ユネスコ世界遺産委員会（セビリア）；ユネスコ無形文化遺産保護条約第4回政府間委員会（アブダビ）；イクロム第26回総会（ローマ）；シルクロードの世界遺産一括登録に関するユネスコ作業部会（西安）；文化及び自然遺産地の持続可能な観光発展に関する国際シンポジウム（敦煌）；東アジア文化遺産フォーラム（ソウル）；熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009（尾鷲）；世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009（伊勢）。



第33回世界遺産委員会（2009年6月、セビリア（スペイン））

国際文化財保存修復研究会

日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として、本年度は「遺跡はなぜ残ってきたか」をテーマとして国際文化財保存修復研究会を開催した（日時：2009年10月8日、場所：東京文化財研究所セミナー室）。同研究会の報告書として第23回国際文化財保存修復研究会報告書『遺跡はなぜ残ってきたか』を作成した（109頁を参照）。

アジア文化遺産国際会議

「東アジア地域の文化遺産—文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか—」と題して、アジア文化遺産国際会議を開催した。日中韓3カ国の研究機関とユネスコ関係機関から延べ63名の文化遺産保護の専門家が集まり、国際協力による文化遺産保護活動の現状と将来について話し合った。各研究所で実施されてきた共同研究と事業、相互の人材育成、文化遺産のドキュメンテーションの標準化など、多岐に渡る経験と情報を共有した。20時間以上の意見交換がくりひろげられ、各研究所間の関係を深めた。

日 時：2010（平成22）年3月4日～6日、場 所：東京文化財研究所

3月4日（木）開会式 参加者紹介、主催者挨拶、趣旨説明

I 各研究所の概要：機構、研究の概況、国際協力の概況

II 各国間で実施している国際協力

1. 石質文化財の保存

報告：日韓共同研究の成果

報告：ユネスコ／日本信託基金文化遺産保存修復事業—龍門石窟保護修復プロジェクトの紹介

2. 都城遺跡の発掘と研究、その保存

報告：平城京と東アジア世界の都城

報告：韓国都城の発掘成果と課題

3. 壁画研究と保存

報告：日中共同研究の成果

3月5日（金）

III さらに発展が期待される共同研究・国際協力

1. 木造建築の研究と保存

報告：東アジア木造建造物の保存と修復

2. 紙の文化財の研究と保存

報告：紙の文化財の保存と修復—科学研究と伝統技術

3. 文化遺産ドキュメンテーション

1) 文化遺産情報の収集・管理・活用—各国の取り組み

2) 文化遺産ドキュメンテーションの標準化

4. 人材育成

1) 各国の状況（国内の人材育成と国際協力による外国の人材育成）

2) 事例報告：日中韓共同シルクロード人材育成プログラム

3月6日（土）

IV 東アジア文化圏と国際協力（講演）

1. 域内協力—東アジア文化圏における国際協力の意義と可能性

東アジア文化圏という視点と文化遺産保護国際協力活動の意義

2. 域外協力—東アジア文化圏を越えた国際協力の推進

文化遺産国際協力コンソーシアムの活動—その理念と未来への希望

V 総括討論：研究機関が行う文化遺産保護の国際協力—その意義と未来—

閉会式 主催者挨拶

研究組織

○岡田健、清水真一、山内和也、友田正彦、朽津信明、二神葉子、宇野朋子、有村誠、影山悦子、秋枝ユミイザベル、邊牟木尚美、島津美子、鈴木環、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、今井健一郎（以上、客員研究員）